



「……っ……っ！」
「ローレンの真ん中でリヴェンはチヨガスの口の中にいた。なんとか脱出しようとしてリヴェンは必死でもがく。上半身は口の中で固定されており殆ど動かないが、お尻と足だけは動かすことは出来た。」

チヨガスはというとすぐに呑み込んだらもつたいなと思う半分、ギリギリのHeavenで抵抗するリヴェンをなかなか呑み込めずにいた。AAを一発でも入れておけばと考えている内に、リバーからエズリアルが歩いてきた。
「なかなかいい眺めだな！チヨガス、手伝おうか？」





「丁度いい……少し大人ひくさせてやってくへ……」
リヴェンの体でふがふがと喋りにくそうに返事をする。エズリアルは尻をふりふりする
リヴェンまで歩いてくると、お尻を揉み始めた。

「なかなかいい尻だな！流石に鍛えてるだけある」
外から聞こえてくる呑気な声にリヴェンは怒りを覚えた。
「……ふざけっ……なっ……！」

「まあまあ、そんな怒るなっ」
エズリアルは冷ややかに宥めながら、リヴェンの股間部分を破り始める。





必死に足をばたつかせて服を破る敵を追い払おうとするが、全く意に介さずビリビリと服が剥かれていく。

股間部分が完全に露出させられ、恥ずかしさと怒りと恐怖でリヴェンは絶望感に包まれた。突如、股間にピトっ何か冷たいものが当たり、リヴェンの体が反応する。



「痛いようにはしないから、安心してくれよ」
エズリアルはガンドレットを使ってバイブレーターを精製すると、目の前の破られたパニーの股間に押し当てた。

「……………?……………」

状況が理解できないリヴェンは困惑する。
「……………」





「あっ…あっ♡あっ♡あっ？…いっっ♡♡いっ♡♡」
エズリアルがバイブレーターを稼働させるやいなやリヴェンは喘ぎ始めた。
「どうだ、気持ちいいか？」
股間に当てているバイブレーターをゆっくりリヴェンの股間の筋にそって動かす。

[illegible]



—ぶしゅっ…ぶしゅっ…

股間をビクビクと痙攣させリヴェンは潮を吹きながら絶頂する。いつているリヴェンに構わず、エズリアルはパイプを優しく股間に当て続ける。

「いっ…っ…っ…♡おっ…っ…♡♡♡こわれたっ…♡やめっ…♡♡♡」

「……いっ…いっ…♡♡♡まんこがっ…♡♡♡ひいっ…♡♡♡♡♡♡」

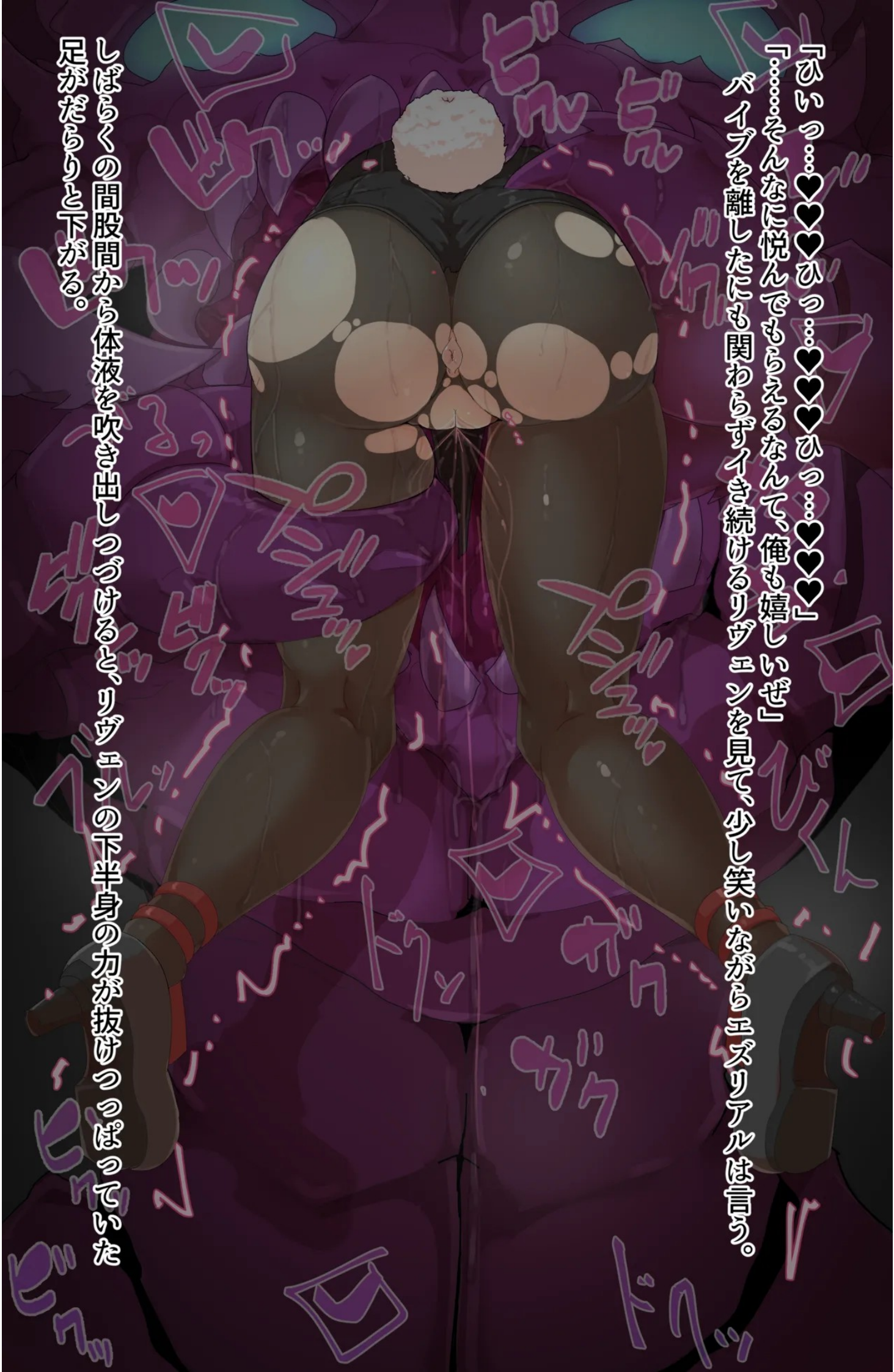
絶頂し続けるリヴェンを確認し、抵抗する意思が無くなったとみるとエズリアルはパイプからリヴェンを解放する。

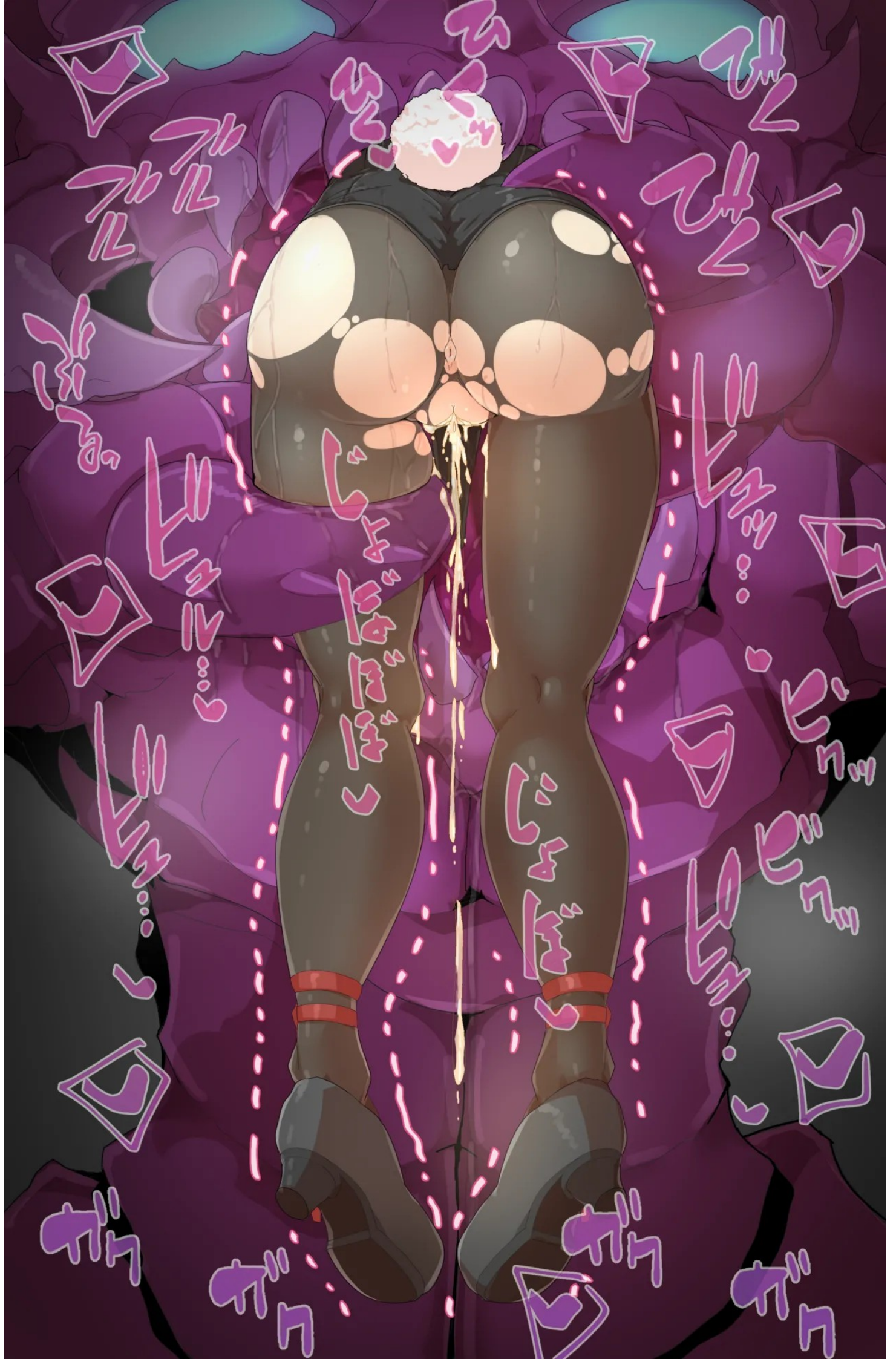




「ひいっ……♡♡♡ひっ……♡♡♡ひっ……♡♡♡」
「……そんなに悦んでももらえるなんて、俺も嬉しいぜ」
パイプを離れたにも関わらずいき続けるリヴェンを見て、少し笑いながらエズリアルは言う。

しばらくの間股間から体液を吹き出しつつづけると、リヴェンの下半身の力が抜けつつぱっていた足がだろりと下がる。



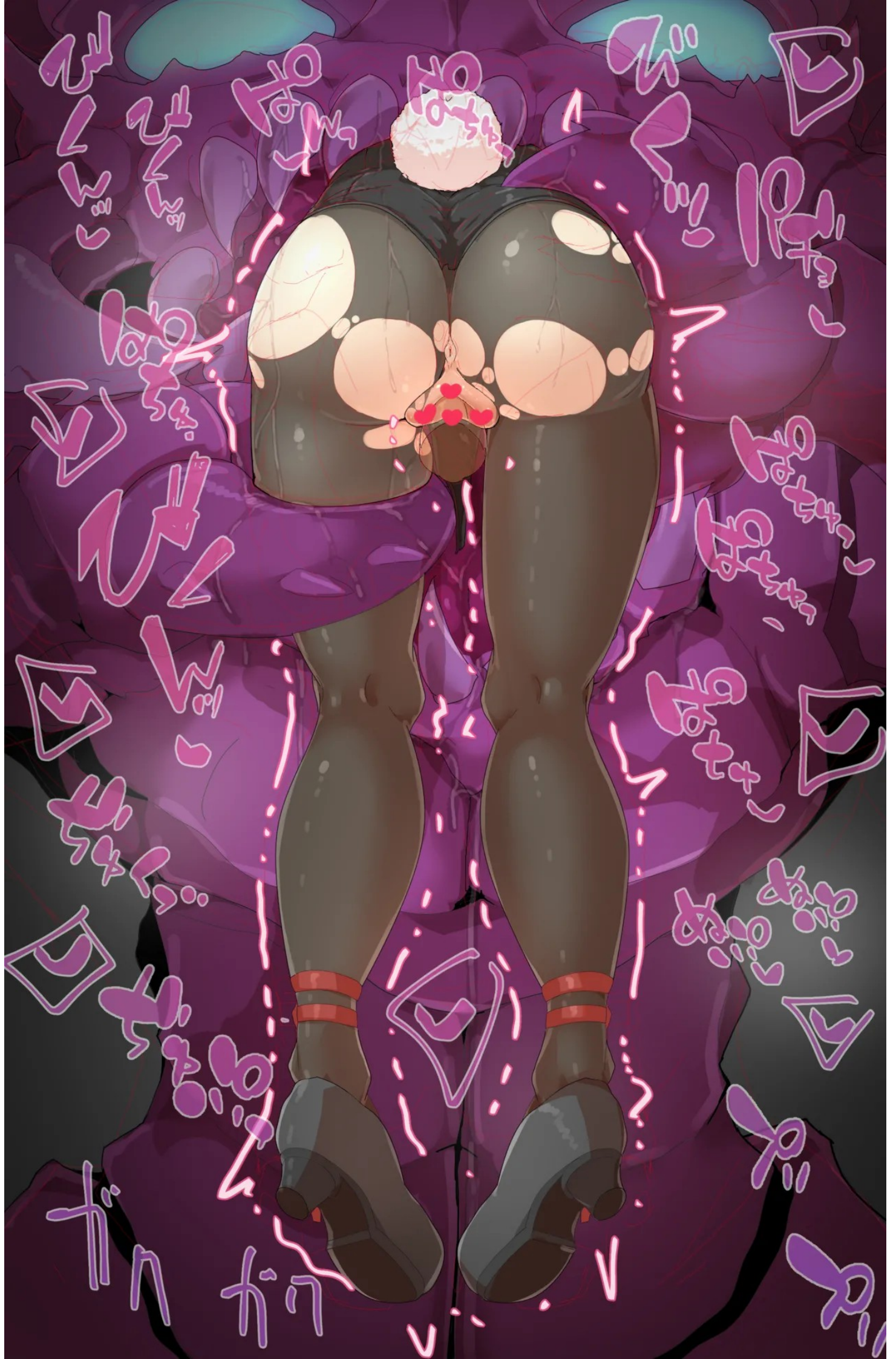


「……あ……♡はあ……♡♡あ……♡♡♡♡♡」

潮吹きが終わったかとおもうと、股間からじよぼじよぼと別の液体を漏らしはじめた。

「あーあ、少しやりすぎたか？にしてもこのまま吞まれるのももったいないな！」
股間をびくつかせながら失禁するリヴェンをみてエズリアルは笑う。
「よし！最近やってないし、ちよつと借りるぞ！」



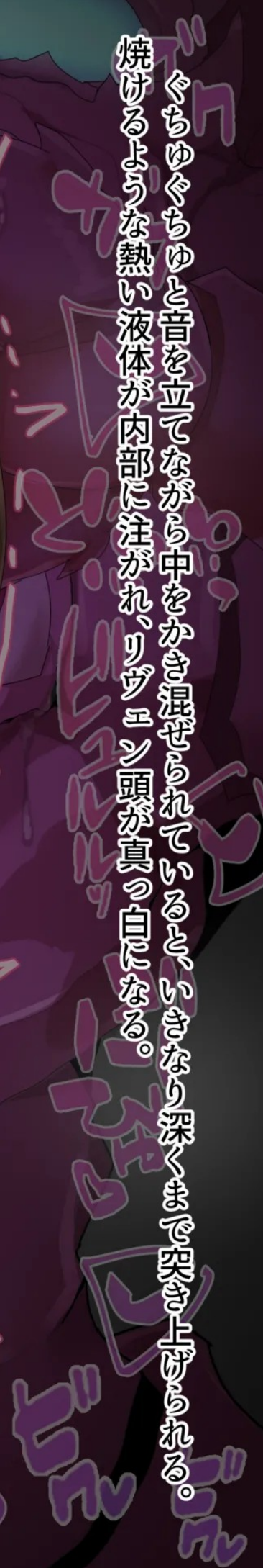


エズリアルは手早く下半身の服を脱ぎ、ピンピンになった一物を露呈させた。
おしっこを出し切ったリヴェンの股間に押し当て、一気に挿入する。

「あっ……♡いっ♡……♡♡♡」
内側を激しく掻き回され、リヴェンは朦朧とした意識の中ただ喘ぐだけであった。







ぐちゅぐちゅと音を立てながら中をかき混ぜられていると、いきなり深くまで突き上げられる。
焼けるような熱い液体が内部に注がれ、リヴェン頭が真っ白になる。



恍惚とした感覚の中リヴェンは意識を失った。



「ふう、なかなか良かったぜ」
エズリアルは股間から引き抜くと、中に入り切らなかった精液が溢れてくる。「仕事終えた
エズリアルは精液を垂れ流しているリヴェンには見向きもせず服を着ると、そろそろとMIDIレ
ーンに帰っていった。

残されたりヴェンはゆっくりとチヨガスの中に吞まれていくのであった。

